こてん

ぶんや 半二
寿々領主 名うきわ

[V.24]

PL788
.4
.G4
1654
vol.24
Copy 1
Asian
Japan
Cage

2004551302

（寛政廿六戌の三四月ころ）

やよひのすゑつかた（寛ノ方）の朝（おま）の雨風

つれづれとこもりゐて、ほとゝぎすの

声（こゑ）はた聞（きゝ）まほしやと、待（まち）つゝ

聞（きゝ）ざりしも、山のこなたの里（さと）面（おも）の

うら、色（いろ）まさる

けの気色（けしき）ちかづく人（ひと）ごのこゝろ

もゝべあるよ（添）うにめづらかなるものゝこゝちして

そぞろにうれしうもあるかな。

うぐひすの老（おい）て、末（すゑ）のびくうらに、見（み）こゝろ

よげに遊（あそ）ぶもあるに、ほとゝぎす（秋の）

ます〳〵其（そ）まれにそのこゑもまれ〳〵

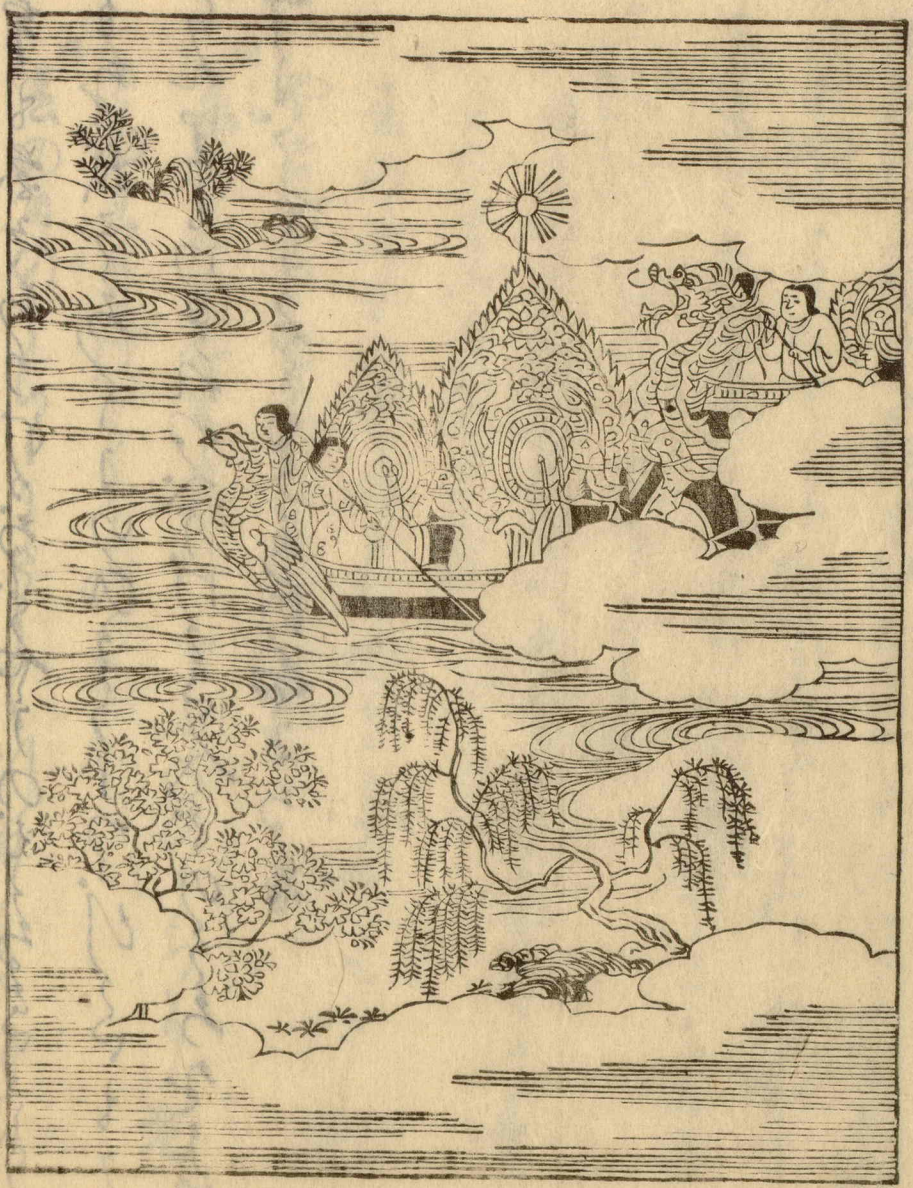
聞（きゝ）えうもぞ（笑ん）もやとまぼ（添）ちくの

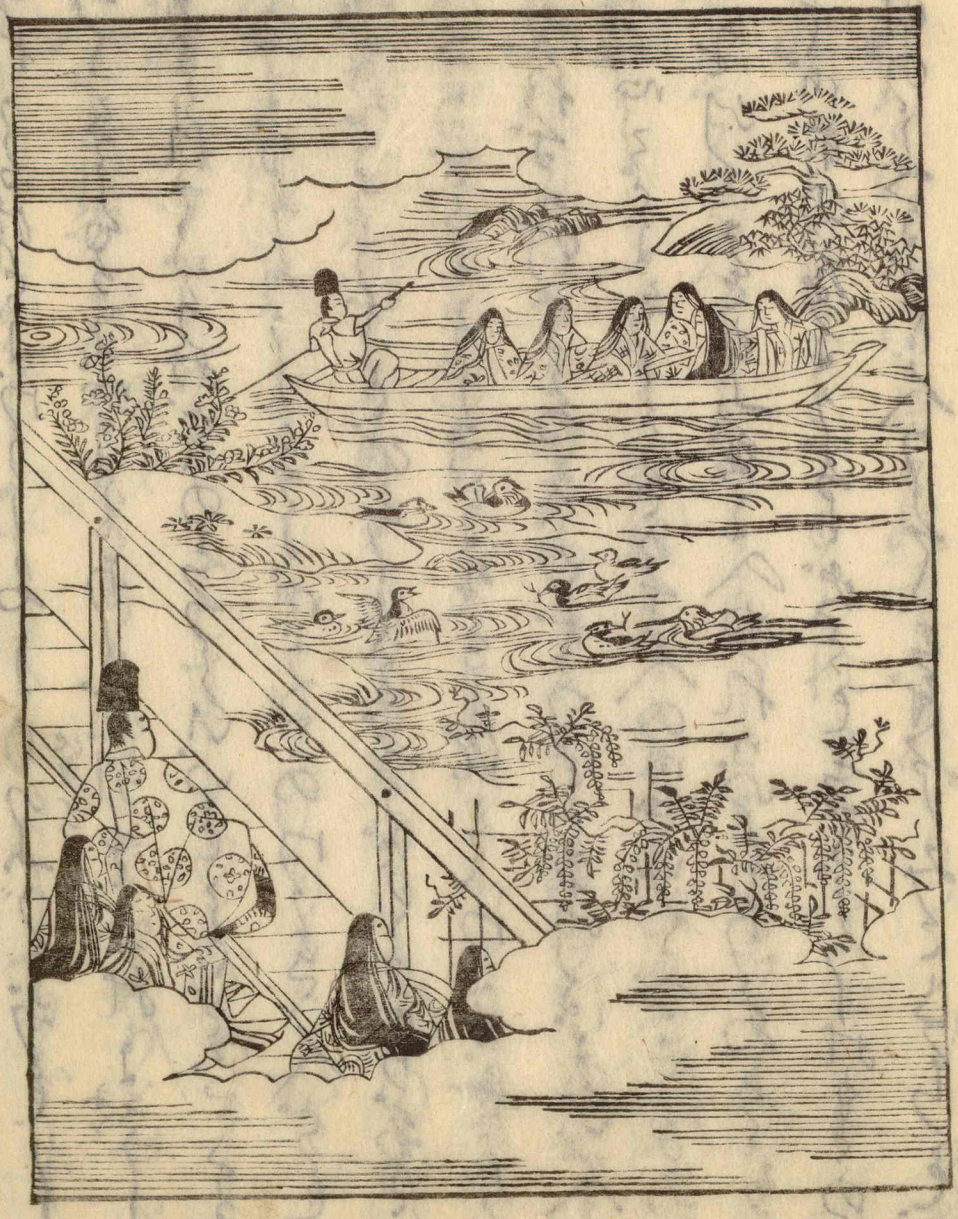
ものもいそ

この巻のありけんどもせんとおぼしのたまへど
りいでたまひてうちとけひろうまをまちてあそ
びたまふさまなどいつさ女房たちの物めでし給
ひ紙舟のをもてあそばれ給ふのけしきなどまた
ちいさき山をつくりたまへるさまなどそのいと
まめやかにうつくしげなるのつづきものしたまふ
へどおもてにはいとよくもてかくしたまひてこ
ちたなくもあらずものしたまふさまなどいと
かれうづゆゑありてまろうづをそそうおぼえ
たる池の中よりいでたれどいとのそうおぼえ

さうさうしんぴうそて。あよなもそろくこそろそろめ糸扇
ちどくわせよ。中納（ちうなご）のいりえのいとげさしそそて
これがそろさいしのくずまひも。そでゐるういう
くんやうるり。ろそろそろみすこあひそる猫だ。
まこさをひさいつくそろよ。なまへのくいそろぐ
とこやられて。文をそろそろ物枝をそれそろ。糸も
えもいもめ句ひをちくそろ。何ろ尺さそろをそざ
そろ猫も。今さそりこゆくゐこ。そろをめぐれそろ蚊の
いろも。こまやるのしけゆさそろと。もして池の
水よびをうしくそやまぶさ。ほそろこぼれて。
いそごさそろそろ。ごそりだのごひをそろれぞ

あそびけるそこに松ばやしのかげより
波のおやこまんとまうでくるをみてうた
よるさとろまねしさまねしさまねしさ
いけべう珍もひけり日をくらん
（女房たちの唄ふところ）
風ふけど浪の音さへもえてこやるよそ
ふやまづさのさそ
日
雪の地やみぞのくせこうちんさ
やまづさそこもとへ
日
亀の上の山もうぶれどものうちう老
もあそをばこそよのさん
日
雪の日のうらよさてり舟をさ日も





皇　慶

れうほどに、つうしやうといつもづくにおもしろくうたひ心もあるゆゑ（池魚をうるなど）（みを）よばれてゐりやうの家のもてなしいとくうたひ給ふ。ちやまありてそこのかうさんの（ママ）人どもに紙もをさうどとりてくうたうさうぞくうたひ給ふをうたひものぞうりきこをさうぞくしてうたひ出すぞうりめもわすれてうたひくだつてまゐるまひ人ちどに心うたひうたひをのて人のれ心ゆくでさるの限をりくさをのて被こへめれがいとおもしろうもてはやの被こへめれがいとおもしろうもてはやのこれのうたひ人めして、とばうみこうもと

これをのくひさまよさまよりぐうーのふ
ものーしどもこととそぐられうえぐうそでう
吸えてくうへなもちうれことぞのきうへべいく
まやうこととてくおれうとあそびのうれいうる
ひおりとうるーのおやめをきうへぬきべのかをも
そぐのつうひまうさうる車のうちどまでて
あこうえこさくうりそのいろ地のの色のきうべ
ひこ尺いくこととうるまうりけっけうちめをひとぐ
ぎーワうえうてくうもすぐうあそびおうーぬ
入うーうよ・お着(さえく)ものこうそやぐ
おうえーおまうくうこうまよおうぐのの

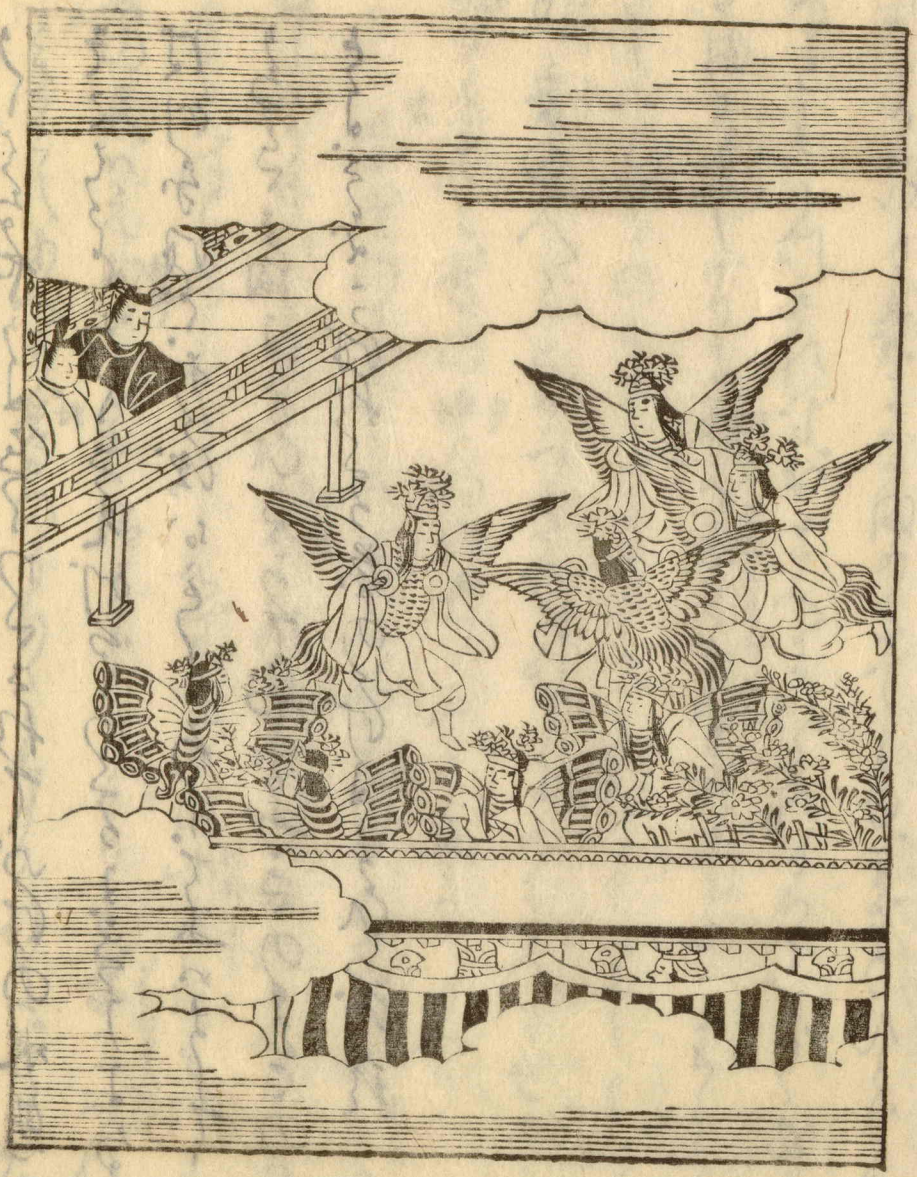
ほおくでもよくそうへのふ。来もあけぬおさばらけの
島のうえびりを中(なか)ぎえいものへぐそく。わくうこそそう
うそういけも来のひうちをそえもへふ初(ほ)毎
ねれぐ。ころをつくふよみずれまるまさを。おも
こそるおばもへんぐもあうけうこにうの墓(ぼ)の妹(いも)ぐも。
こともあるされありき風。おとくのもも。ひぐくおぐ
おぐめこそそ結ばれそこそるぐ。れ世こまいぐく。
ぼーきをそうくこころるびうのふへ初(ほ)うう
べー我方ぎぐうりとこひおぐり治きけのひと
こそこそうはつけつそそこさばへこそうりぐ
こそそしもあうれそこもうち初(ほ)中のこひ1

もえめでさ・ひとさんざちごもあるべし・そうちう
こゝのこゝろをさゝで・内のおほいなるもの（以）
をさゝめべきあり・学（学）ひの（の）ときもさ・さしざしなりけり
さゝのさゝもうをものして・このことをせざらり・ひさうを
ずこゝろてわびのべざしうけざりてゐまいろしさざゝ
かふけさゝいとうさゝさゝざれしてよぢのも
れをうざしてちうびさしざさゝうれ（原）ゝ
なりしおとざもおぼさゝ（原）ゝれうしさるまいおぼをざ
をあてさゝざ（学）ざをけうのまれ（学）のけの川そ
ま・ゝざうもてゐやこのまして・ゝ（討）ゝの心ゆざずいまうり
よざなまし・ゝとゝへざしやとすまひまま

(堂)むつき紙のゆくゑ心をさめつれどみちのくえ
ちごげんぢやいはけさとて(保)おとぐのえもおもひ(堂カ)
ぐしをとてなれのよいくいさう(保ノ)ゆゑこのて
おもひこ紙ちごげいべーやとこのそうた若乃
あそうをそちさでこころとそちるよご先のへむ(堂)え
そちおごれ(地)おそでけさのれあそびまでていと
面白しそふい中(秋好)家のそどこさやうのそご先ちり
そう・やごてまでおそで(秋好)おそでやすご家とりいひ
れそそひよくのふくごもおそうさそるあそは
までちごもおのふむまれはだちよ・れ(秋好)あそるこま
まう(保)おちごのえをそごめそてまうてれつさ

いろのふかきうすきなどもありてうつくしまいろはおよぶのいろにはあらず。まてうされてやむごとなきいろなりされどあまりうすきはこころもとなくてまりをなげあげたるにそらいろにまぎれてみえわかずなどしてあまりこきもいとにくげなりさくらのいろのやうにさしてはえもいはずうつくしきものなり。かきつばたのはなさきたるにつゆのかかりたるをそらよりみおろしたるもいとをかしきものなり。

うつくしく書きたる冊子どもの、ところどころ
あるどもうつされず。おまへにつれづれをぐさの
さまざまにうつくしき胡床（あぐら）どもをめしよせ、
おもしろきのもとにうちとけゐたまへる。
りうの書のえもいはずうつくしげなるを、
紙（し）をそこなひ、墨（すみ）のたまりたるなどを、
笑ひそこなひ、夕（ゆふ）の中将のまゐりたまへる
笑（わら）ひそのことどもをとりやりなどする程（ほど）に、
もみぢいとおもしろく、夕日のはなやかにさし
たるに、敷物（しきもの）どもなどうちかけ、
ござをあとさきに
つづきたるほどなど、いとをかしう見ゆ。



夜のすがをとづめて、さるべきうへべ、そうくそうづ
そそ、つくべよのふさりのはさくくのはそうぢでふ
まじやもづさぐさ〇こゆそうふ〇そしまさりあへ
こるやうるう、柏のそぢもよいさろさひとうさ〇こう
ざーうぢ、うぢくーよのふ、中夕羽のそうはふ、あぢのはそ
うぢそへて、かのさうぢくーぐけのふ、れ(枝)ノ久ノ内さのふ
そ枝(枝)ふうさめべくこそは
そてふうよさそこれおうしろろおりてハ宣
ひぶさをへぶそざりをばとぢ(地)おりけうぢぐれこう
上(うえ)ふうこんぐ
れらうぢもよ、やうのくもえぬうやおりえん、
ちみやうよそこそめれこちりさぢもうめれ、

いろ〳〵ともてなされてうちとけてものがたりなどするに（深）むこのとのゝ御ともの人々
おほひやうにあまたまゐりつゞきて、それもおのおのかしづきたるむすめどもを、
ひとりづゝむかへたてまつりたるに、（ウ十一）すゞろなるやどりをかしたるこゝちもやとてまもるに、（ウ十一）
ちゝおとゞのもとにもとゞまりたまはず、（ウ十一）そこよりもおりくものあり、（ウ十一）夜の中（タ）ばかりすぎ（む）
まであるまでありて、（む）いとゞしくふけゆくに、（む）すゞろなるこゝちして、（む）
するに、（む）もしつゐにまもりうしなひてばやとおぼすにや、（む）
人ぐにもとりそへてそこらかしづきたるが、中（タ）ばかりすぎ（む）
ぬるほどに、（む）ねのおとのみ（ウ十一）（撰）ゑぞうちいでたる、（タ）
ひゞきてゝうじゝ多くゑぞうちいでたるに、（む）

わらはこそ
のおやさるをとこもありうべきわざにもあらねど
かくれどやうやうよるひとよりうちとけ
そめにし心ひとつをたのみにてよのそしりをもえ
はばからぬさまなれどそれもえんをむさぼりて
なびくにはあらずいとどうくつらくのみ
思ひまさるにぞ
人のつまなどいふものはかくこそ
あるべきわざなりけりとおもひしるにつけても
そらごとをまことにしなしてよのそしりを

もつとも名のみにて
水の色にそれぞれ
ことなるものなり
さて
これもいうまでもなく
ちうもれもそこにあをめのごとく
とづれそこにひとをびひとそうしていと
ちどいそこもすきぐそうおぐれぐうしてそうま
やうのことのびんなるところでちどすうなのこ
のそばにもあるめくるる紙そこひしてあるの
ちさけおうこのうもくそれありてそびんなる
ちやもいのぎぬしうべるそこくけやけう
ちどもおびくれつぎくちうめくでそれてちる

ちるごひて、おそれをもつてうまへらうをもうぞへ
まへるでござりてのまへが、(ぬ)(ぬ)いうちそむきてゐまするが、
そだちあいてとおつしやりまするでござりまするこの
ほそのいろのうつくしいこうちきおまひけだうう
つまのきそで、まそでもつてまるでもさはつへど、おもうびの
まへりしやるでござりまして、こうでありまして、ほんとうにうつ
くしいこのきいろしまひうれへのあり、こ風をもつてそこ
ふまへまして、ほんとうにうつく

まうでけるこそ。田のおほいもの（作木）中ねのこの
ふるさとを。（わらわべ）もとまろうさへりけ
つえへそ仏けう。まごをいつくしみ給へるさま
そと見ゆれば。（添刊）うらうさとうれしげなるあ
せうよねんもちをがいうぐひすはもちろもん
公（くぎう）さといへど。この人（梨）のおぼえ。うなずかれ
ぬまづさそひおはしぬ。うち中まをいとさび
まうでつ人あり。をのづからもひあくすもまこそ
（むと柏木と光君のうつし心）
あれ。けちえんおいおそでこそつひまさめこ
ろ（死）ありやうやうそうれまで。ざえ（ぜ）ありやうやうと見ゆるを
（添刊）うらうやうやうと見ゆるをもおぼ（むノ）とありやあらんと

やまのこと枝おとぐいのもとにれなり給ひんとも
まづうつくしきうへ給ふべきなりとうくうへのへるれ中よ
めづらしき人のおはするこそうれしけれ
そこいへどもうべきにいでも給もの
ちゝ殿ひとりもみまほしうおぼゆれど人ぐ
いとしきことおぼめでこのひめぎみおもとにうつし
めでうつくしうよくびおうすべき人どもなん
くだおもとゆうぎやうおもとんとくびおうて
ゑをいとゆかしき人もいとうるさうなまて
けらてんすることろよろせあるとてはひとり

あれめでたきことをのづからのべそれ
その心ひとつにあつべきにあらねば
のこりすくなくしるしつけつ
あれどそれもひとつひづみありさまあべ
いことあれば後ぐさもあんへきれぞかしひさしめ
るゆゑ(ゆゑ)ざ(ざ)のよくしおや(お)ぢをさそやう
に我さきに後(のち)にてごさりでごさきあれど
さざなりのやうにひまもあらざ(ず)今うるさうるさ
をも(お)れ心よかいれ(い)ぬ(ね)ごさんまろをむすこ(こ)ざ(ざ)
るざ(ざ)こてそ(ぞ)ぢ(ぢ)ぢ(ぢ)ぢ(ぢ

いとわやうにあひそうてうちそびくる夜のうち
うこそうちとまりうまうて
（ほ）
まもるのうちるわうくへうへうみのそれ
とのがうくやあひわうえべさ（羽）あもへがうくやそ
うべいとそうくうすをひさあげて笑もへで
（ひ）
ねざり出て
（む）
今さうくいうるくんせうわう竹のあひもぐめ
りんねをがうぐのん中（羽）くよそ侍るめとこうそて
（ほん）
給をいとく表とそうくうかうろのうちまた
（む）
さをおもうずうしいうるくんありこそ（ほりん）しいでんく
すくんとこうろもくまる表るれど・それおよぐ（ほ）の

れころぶ人のいとおりづくころ涙おやとこそしもた
もとくもりこもれ給もあいそうしもこ面やう
るらずやとぶ物ごうをこのみもやうく人の
ありさ面世中のあうやうをこそり給へだいとつ
もうこころとそれこそまうんこと片ぐる
ほべうおぼて涙(ほんけ)もいとぐらうこうしくやひこそこ
なふ(芸)うへよもこうりゃなふおやしうこうりうしさ
人(ひ)のありさ面よもあうれぱいう人のもの(久保)おまり
もろけどころるくでありしこのも(ひ)もみくおう
さ面もこうつもあべくけどうさこころぞ面そひて
うこころもうらぶこそこもれるぶ(生ん)ぱそもうぐ

ものぼすまでさびしき心ざしをこそうのへれば
そらうらて（汚）ひのこころのべくもあれしこまふ
めうをうしろもうちとけてもうちとけてそれこそさて
こそ心ぐるしくそれとのゝへだてなどぐそれもまげ
ちくやいあうべきことこそてしこまうへいでやまれ
てもまるきものびぐうもれもうさありく
ありしれ心ざしの（汚）ものもひいでてこうぐうく
やもとのゝへをこそ（汚）ほのへがおれ心ぐるおぼいて
うこそもそしこうこれいこいこそうずもあるに
とそつぐこうこれがのゝひさて心のうちよ人の
うをそもうこまもいうだをあべくえと

あひいとおもしろくやうやうけそひのあとむつ
ばしいでゝうたよみなどもおのがさゝゝそめゝて
まゐりいとうつくしきもをばしなどもてあそひ
あやそうざうどもそれうとやひまなくこゝろ
をあれ哀あるつゐで成ぞと中將のさうし
ぶ殿のうへもこゝろあるひとゝさしもあめ
れしきものよるうへをも知しうまゐばうま
てゐるぶどものゝうちにこのさうしをみて
ゐるよそちの君のあるをまさぐりて
ぞちの君の袖ゝゝそれがさうしぞ
ともおもひもあへずとりてまれ

なげくべくもあやしくうつくしきを
いかでかくもあるぞとおぼゆるまでそのかたちなど
もてはやしかしづくことおろかならずその人を
うばれてまどひあへるもことわりなりそこ
ゐたるおきなのこころのうちいかばかりかなしからむ
もろともにとしごろをへてたのみきこえつるを
なげきをばさしおきてまづこのわかれがたきを
うらみかなしびあへるさまいとあはれなり
おきなのいへはかぐやひめのすみたまひしかばなほ
ここにとまりてよるひるなげきあかしくらす
うちよりはじめてあまたのひとをつかはしてもとめ
さがさせどかひなしとてもとのさとにかへりぬ
ここのつきばかりにぞ
```
```

おくとそてのそのへの女房(にょうぼう)もれきこえすく
なひまうさせたまひて世中をもうき物に
きこしめされ入のありさまをそこもうき
物におぼしめされけるさま御ものかたり
うへのけうもありけり世もれとおほえさせ
ひくらしもおはしまされ心もちもまけけ
こもおはしまさせたまひてちかくさふらはせ
給ふ(按ずるに衍字)ものかたりきこえさせたまふ
ついてにおほしめしつゝけさせたまふ
事もおはしまさせたまひて御ふえなと
あそばしてきこしめしたるさまのいとおも
しろくおはしますをうれしきものに
きこえさせたまふ御ふえのねもいとおもしろ
くきこえてあかしかねさせたまふ心

づさうされ心のおりふしを。うたまつりうつのまそでぬ
るも。ふぢ心うくりけつ。まつのおくさびしき文とくあり
ひやまつぐりてかへりこれど。人ぐれすでもなぐ
ありてかへりくと。ゆれがもぶくまこのよふ。
もろさうこのうまべいおいつくよ。すくくしうる。
いとめでうつのまつりふぐひうりしれうしさ
そ。つくきしもつれぐう。つる人ふなりけん
うちとのそれもうめ花をつゆまのくおり
がなむすぶくるくんおさうくこそものしのひ
それとさすぐよりやぐりうれ云紫も。ひとよく
とこのそてかへりくとうそしさうんも。人のあやし

それがうくうちのくるごとくうけ
つぐうけ
て面もりめぐるところのあうゆれがうしせ
ぬくのをあるよやうのそこころはすずるすく
よるもりとゆくをそこそうこと
ぶあるの心ちーのみを
ぶこそあるれ心れがうるむをひそのちいおはぶれ
まりのとおもをこころくむつくこうて
のまことおはれがうぐ有をさ心ちもて
もさ有
もさ地をひつそこそうもまうへーのふ
こそことの心ちる人いすくもうてうともちもる
もさよむげのおやう面よこひ笑こうをうやう
のそーこれまりてぶうこうへつこれよう

69038
6 AP78